

462-3633

1968 8 12

# 戦友

創刊号

- 10.21国際反戦全国高校ゼネスト  
についての府高連からの提案
- 府高連運動の中間総括

大阪府高校生連絡協議会理論機関紙



基本各一カク

■全大阪の先進的・戦闘的高校生は大阪府高連入結集し、  
全高連結成入之の戦列を強化せよ！

■反戦反帝斗争の旗の下プロレタリア統一戦線の一翼と  
して徹底した攻撃斗争を行ない、その旗を日常(学園)に  
活動入と逸流せしめよ！

■ダイナミックな斗争の中に革命的大衆を結集し、自治  
会加得を争ち取れ！

■教育の帝国主義的再編阻止！権力機構を根底的に打破  
する学園自主管理II学園コンミュニオン設置を追求せよ

# 10.21国際反戦全高連結成入について

## 府高連からの提言

— 大阪府高連執行委員会 —

一 序 —

かつて『革命』という言葉がインテリ層を酔わした  
ように、『全高連結成』の口語が叫ばれて久しい。我  
が活動家諸君は、自らの獲得した『意識』を論理化し  
得ず、言葉を持たぬまま『大衆入』と廻つてりかざる  
を得なかつた。『H・R討論』の利用において、一級高  
校生の問題意識をほるかに越えたアシテーションを引  
つこととはなしに、高校生自身における日常生活の圧  
迫に対する素朴な疑問から発せし、これを我々が一定  
の方針をもって下向分析していき、かゝる討論を経て  
H・R内に一定のシンプを結集させ、これによつてよ  
り多くの抵抗派を生み出し、更に関係委員を確保して

H・R討論のハゲモニーを貫徹していかなければならぬ  
いへば、高校生公議(総路線結成)と、ぼそぼそと語りは  
じめる時、その論理構造において、我々が差別してき  
た筈の『民主青年同盟』と何ら変わりなりのことを知る  
あくまで反『代々木』としななかつたのだ。自らの言  
葉の少なさを、主体的力量不足を『大衆の無知』に転化  
するな。我々は、高校生全体に共通の抑圧を、そのの  
みでは解放され得ず、全人民的解放と共にしな上場さ  
れ得ないことを知らねばならぬ。足体の外に部分か  
あるというカントの思想は、ヘリゲルによつて既に兼  
り越えられた。月としての高校生運動は一国社会主義  
の如く何ら有効性を持ち得ない。『高校生の日常の疑

問から下向分析』させていくことは、むしろ大衆蔑視  
のしなないことと自己批判的に総括せねばならぬ。

70年安保が二年後に追って来る現状より先に主体的に  
動けとめられているのみ。現時点の運動に埋没する余り、  
近視眼になつてはいないだろうか。民衆の『反米愛国  
路線か、意識において革命的なものであろうとも、インタ  
ーナショナルイズムを忘却して去った右翼プラグマチズム  
ムであることと、我々は断固弾劾しなければならぬ。  
我々は、断固として、状況にアタックせねばならぬ。  
10月に高校生へ大弾圧が予想されている。それに抗し  
うるには、我々の不屈の闘いのみである。しかし、そ  
れが防衛闘争とされる時、個別的阻止はあつても、絶  
対に前進はありえない。

密偵攻撃は煮つきり、それ故に、主体的な困難度は  
増している。70年安保は、不況の嵐はあるが、自然発  
生の高揚はないだろう。昨日、マルキストとして宣言  
した者がおちよゆく今日、我々はもうママゴトは止め  
よう。ブルジョワ価値体系たる市民社会と国家におけ

る『民族国家』のX軸をつぎぬける『人類』と『階級  
』のY軸を構築しよう。高校生個人は『人間』として

『人類』と同時的な意味を勝ち取らねばならぬ。  
市民社会の擬似普遍性を見抜く者は、その延長上  
に、より良い高校↓より良い大学↓より良い就職  
という基本的シエーマを打ちたてる。そうである以上  
自由であり平和であるのだ。我々は、ブルジョワ民主  
主義にプロレタリア直接民主主義を対置せねばならぬ  
いように、ブルジョワ的自由と平和を崩壊せねばなら  
ない。残念ながら、彼は自らコミュニケートを閉ざし  
必死になつて市民社会の甘いドロ沼にのめり込もうと  
する。下部構造に規定された上部構造が存する以上  
ブルジョワ社会下の人間が、意識のみ解放されること  
などありえず、無意識の大衆が、自らコミュニケート  
を閉ざすことは当然のこととせねばならぬ。ヒトラ  
ーは演説の中之極めて、面白い発言を述べている――  
我々自身が社会主義者であるが故にボルシェビキに反  
対する。『革命』とは、ハルショワ・プロレタリア

を問わずに既存の価値観のその根底からの変革である  
我々は、それ故に街頭で闘っているし、学園闘争にお  
いても、市民社会の根底から揺るがす闘いを通じて必  
要なのである。彼の立脚基礎を喪失し、市民社会の擬  
似普遍性が暴露された時にこそ、初めて我々は眞に闘  
りかけるべきである。全人民的政治闘争は、そのよう  
な過程を通じて市民社会の意識的解体をなし勝利を取り得るし  
70年以降の中心が千人、二人に増えたとしても、何  
ら力を得たが、それ故に我々の場合は各高校での  
ものより激しい闘いのみならず、70年安保を闘い得る。大  
阪府高連盟を代表して、市民社会への根底的闘争たる  
10・21国策反対国民総動員を提起する。70年に  
喜劇を演じたくなければならぬ。

### ① 状況

現在、不況の嵐が吹き狂っている。賃金の上昇に比  
して、物価の上昇は之の止まることと知らぬ。単に  
る賃金の増えは言ひ切れぬ不況を我々は、直観的

にも提議しよう。ドルの暴落を基軸にして、米帝は大機  
械に揺られ、各国帝国主義は、独自の利益を基軸に出し  
つつある。日帝の沖縄返還議の上からの持ちこたみナル  
ショワワー内部の分裂。北緯のNATOの軍事同盟へガ  
モニートの米帝からの獲得。仏のドゴールの『自由ケ  
ンカケオ』に象徴される米帝の露骨な露骨。そして、  
右進国の民族解放闘争は、増々その非妥協的様相を呈  
し、帝国主義内部の反戦闘争へ波及している。我々は  
10・21の反戦ストライキを歴史の英雄的転機の上に立  
つて提起せねばならぬ。

### ② 基本的前提――現代帝国主義の再評価

ア戦後世界体制II EMF マルタ体制の構造  
イ第二次世界大戦終了後の世界体制II 米帝の露  
骨の独断と長征と其の中心を基軸としたIMF体  
制。戦後の独断と長征とした米帝の戦後体制II 平和共  
存というマルタ体制と形成された。即ち、経済的  
にはIMF、マルタ体制、政治的には国連、軍事的  
にはNATO、文化は米帝の中心を基軸とした第二次大戦で打撃



を受けた敗戦帝國主義への革命的な打撃の爲の  
國際的及國內的遂行の下に米帝の一元的支配が現実  
化した。そして對付遂行においては、後述のと  
り7名の下に重層的な聖的介入の計り、その圧倒  
的の生産力を背景に吾等米帝の波を防止する役割り  
を果した。かかる構、兵之米帝國主義は吾等一元的  
支配を果した。

イ 日帝國內の支配体制

日帝國內の支配体制は、そのイデオロギイとし  
て、米帝主義を提出され、そして、それ加人民抑  
圧のカムフラージュをなした。具体的には、労働  
者の独自利益を犠牲（競争斗争しかなきなり）し  
↓総評→既成政體という形に収約し、又、中身  
委、公明堂等の調停機關を通じて公務員を収約し、  
又、中小企業家等はその國家神像を通じての中小  
オニ産業の収約として、米帝國主義の農民収  
約をなした。そして、その諸階級、諸階級の利害  
を代表する代議士が議院という取り引きの場に登

民地化なりということ、資本の階級主義的性質本  
況の時代を到来せしめた。それは米帝に、それま  
での内的膨脹期資本の自由競争の時代（野蠻）  
の終了を意味し、金融力強期による資本の集中へ  
独占→外的膨脹（對外進出）へと向かわせさ  
るをえない方向性を提呈している。米帝の進出の  
低下は、必然的にバルタ体制の崩壊、破綻を意味  
し、各国は動搖しつつも、新たに史上三度目の世  
界市場再分割戦へと始動を起している。前述の各  
國帝國主義の独自利益の追求は、かかる過程と背  
景として提出される。日帝ブルジョワ内部に於け  
る米帝の従属的地位を固持しつつ自己の進出を計  
ろうとするオールド・ライト（佐藤）と、米國界  
力を排し對東南アジアに独自侵略をかけ、積極的  
に對外膨脹を計ろうとするニュー・ライト（三木  
）との対立が明確化してきている。この過程に注  
意しておかなければならない事は、まさに以後の

場し、若干の利益を彼らに与えることによつて、  
彼らの不満を合理化させ、國家の下に包摂させる  
役割りを担つていた。そして、かかる支配構造を  
支えるものは、経済の高度成長であった。そして  
米帝の一元的支配機構、すなわち對付遂行援助、  
ドル散布によるドルを朝鮮半島等へ吸収すること  
と、国内投資プログラムによる、好景氣の重化学工業  
化の内的膨脹過程によつて具体的に維持してきた。  
帝國主義の不均等発展と平等化局面

一九五〇年前半の六〇年代前半はEIEI・日本  
に於ける高度成長と重化学工業化をなしてきたこ  
とが特徴的である。重工業を軸とした労働者集約  
構造は、米の一元的支配を貫徹する事ドル散布  
と競争的にEIEI・日本が高度成長し重化学工業  
化を上げ、その発展は不均等であつたが、米帝の  
ドル散布による地位の低下も相まって帝國主義の  
平等化局面を迎えた。國內の重化学工業化の終了  
は、必然的に過剰資本輸出を迫り、自らの下に植

日帝の進出を促した。ニュー・ライトの主張は  
米帝國主義の「独自利益」を追求することである。  
そして、民生・公明堂に至つては、反佐藤といつ  
た下のニュー・ライトとの闘争の歩を既に歩み  
始めていること、我々の任務として捉えねばな  
らぬ。かかる情勢の中に米帝内部にも、強硬に  
バルタ体制維持のタカ派と東南アジア支配と日帝  
に（ドルを）爲代りさせ、新たな支配秩  
序を構築しようとするハト派との対立として史上  
三度目の吾等市場外割戦の到来を明確化している。  
かかる状況、IMF・バルタ体制がドル・ポンド  
危機を中心として動揺し、その米帝の一元的支配  
の動搖が戦後帝國主義國家の相対安定期を終了せし  
め、新たな各帝國主義國家の下に植民地をかかえ  
込むと口づ、垂直的支配構造を確立する新たな市場  
分割戦は構造的不況、帝國主義的膨脹の時代は  
日帝ブルジョワ階級の対立を生み出すが、現在

『武装せる労働者国家』が一方に存在しているが故に、その対立は外化せず、具体的に1917年以後に国家間協定として現出せしめらるる。

工過渡期社会に於ける攻撃型階級斗争

(一) 我々は、『現代』について若干論及してみよう。ロシア革命前の世界は、帝國主義国家群とその植民地国家群とに大別され、各国帝國主義は、國民經濟を基礎に国内を民族ナショナリズムの下に統合し、その(民族)から世界支配を展望する侵略形態としてあつた。資本が国境を越える故にそれは基本法則である。それ故、市場分割戦は露骨な形の帝國主義間戦争として現出した。『帝國主義戦争を内乱へ』というレニンのテーゼは弱い帝國主義内部のブルジョワ階級を打倒することにおいて可能であつた。激動型階級斗争と呼ぶ。しかし、ロシア革命以後、特に中國、モロバ革命を経て、世界が先進国(帝國主義国)・後

機は機嫌(ゆず)や戦々(はれ)を証(し)するはなはなり

ともかく、**國際反革命時**、プロレタリア陣営における**最も有利な状況**を呈している。それは、プロレタリアートが**國際反革命崩壊の旗**の下に世界的不結合が可能となつたからである。世界革命の**現現性を現出せしめた過渡期社会**に於ける階級斗争をまさに**攻撃型階級斗争**という。

才(才)外侵略を保障するもの

市場再分割戦に勝利する為(日米關係に規定するならば、米帝はより少なく東南アジアを日帝に肩代わりさせ、自らの最大限の利益を計り、日帝はより多く自らの手中に東南アジアを治めること志向する)に、ブルジョワ階級にとつて自国のプロレタリアートと域内平和を取り付けること加害者の問題としてあつた。ブルジョワ階級は**國家的團結**を叫び、**國家利益**が個人利益を包括するといふ論理の『**國益論**』を提出する。具体的に進行

進国・そして労働者国家が存在する時代は過渡期社会の到来と共に、階級斗争の質も変わつてきた。労働者国家の成立に規定され、NATO・日米安保に象徴される歴史上初めての**國際反革命の登場**が決定的原因である『**民族**』→『**世界**』と、その一方の『**國際反革命**』→『**民族**』を見なければならぬという矛盾と背負うことになつた。その矛盾を止揚し得るのは、**國際反革命の盟主**になることのみであり、それは米帝が唯一維持して、唯一の**帝國主義政治**をなした。復興帝國主義の**日帝・独帝**はと言へば、**國際反革命の遂行**の中での侵略を志向しなければならぬ小ブル政治しなせななつた。帝國主義の不均等発展とそれに伴うブルジョワ階級の分解はますます、かかる矛盾・ジレンマの表現であり、日帝・独帝が帝國主義政治を志向するとき、**急激なファシズム**としてしな表現しなない(詳しい論証は、後の

している事実は、①**基盤産業**プロレタリアートと**若干の利権**を買取し、いわゆる『**労働者階級**』にすることによつてブルジョワ階級に引き入れること)ハル・喜王族の合併は獨占の最も象徴的な例だが侵略に備えての**國際競争力**の強化と一方労働者への**分け前はむしろ増えるもの**としてあることと理解する必要がある。そして、②**中小・ルンペン**・**中間層**を徹底的に切り捨てることによつて、かかる部分を**J.C.同盟(労働者階級)**、**『國益論』**でまとめる込む一方、**なほ且つ反帝・反獨占(反國家政策)**として登場してくる突出した部分への徹底的な**國家権力**、**警察機動隊**によつて鎮圧する構造としてある。そこに於りて高度成長に支えられ**を抱括**していた組合(ブルジョワ階級がプロレタリアートに若干の分け前を与えると斗争は『**妥結**』した)も、**國家**は不況故に組合の**經濟斗争**すらも**抱括**しえず、諸階級は個別利害の下に分解し

屈への共闘争議・経済斗争にもとじてまた、学園斗争にも国家権力が登場する時代となった。国内はあらゆる部外に於いても帝国主義的再編の渦中にある。軍事的には、オシカ・四次防を通過して、帝国主義軍隊の確立をいそぎ、「小笠原返還」を契機とした自衛隊の承継と、「沖縄派兵」↓「核基地付き返還」(細かい成り行きはわからないが、日帝の方向性としてこれか上げられる)を通じて、アジア後進国民族ブルジョワジーカワの叫びかけ(①英仏帝国主義の東南アジアからの垂死上の引き揚げによって、解体寸前のSEATOに代わるものとして、東南アジア支配者階級から日帝への反共軍事公認としてのASPPACへの強い要望。②ベトナムに於ける米帝の一定の後退による後進国民族ブルジョワジーの対米不信の増大と日帝への期待)も相まって、アジアの軍事的侵略の根柢はアジア反共反革命の前線基地化を目ろん

ざいる。自衛隊資格者名簿↓徴兵制は、紀元節の復活、明治百年の宣伝等、愛国心の鼓舞とからみつつ「国防論」に収約した形で成立させようとならっている。まさしく、教育部門への攻撃、国家権力の介入は、かかる帝国主義的国内再編の大きな要素を示している。教育、市民社会の知識の源泉を国家が掌握することは、対東南アジア侵略反革命政治の遂行と容易にさせる大きな比重を占めている。我々はかかる観点から教育問題、我々にかけられている抑圧を見なければならぬ。まさしく、我々高校生の個別利害は、被抑圧人民の共通利害の中に抱括されるものである。

## (2) 反戦斗争の分解と我々のとるべき態度

府高連ニュースNo7を述べたように、「反戦斗争の言場は、既存の吾界体制の動揺・危機に規定された自覚発生性」であり、「小ブル反戦運動の切り崩し」と

してあったヨバリ和平公談」や「帝国主義内部に於ける危機を逆手に利用したヨ利益国防論」による人民の国家の下への吸収策(マスコミ統制強化・教科書改悪)神話復活・紀元節復活・期待される人間像・明治百年の鼓舞は、「挙国一致体制」確立の要としてあり、自衛隊資格者名簿 徴兵制へのイデオロギー統制としてある)等によこ、反戦斗争の深化は権力と真向からぶつからざるを得ない」と知る時、里節は動揺し、二極分解する。一方に於ける社会排外主義への転落(ヒューマニズムに依拠するあまり、米帝追撃斗争のみにしぼり、日帝の独自の対米自主性に盲目的であり、密観的に見るならば、日帝に尻押しをすることになる危険性が大きい)盲目的な戦術的ブジカルさは何も語れない(他方における、反戦反帝斗争への目的意識性の形成である(一般的に我々は反戦を叫んだところは何もならない。ベトナム戦争においても、人民を抑圧しているのは、米帝であり日帝であり帝国主義国家

なのだ。それを見極めて、自国帝国主義のものに対する斗いを展開していかなければ、何ら決定的効果はないし、そのオシカベトナム被抑圧人民と真の連帯を勝ち取る斗いなのだ。我々は、徹底して後者を、それをも目的意識的に追求していかなければならぬ。「反戦斗争」の中に、具体的なベトナム被抑圧人民との連帯の視座は国際主義があるし、学園における国家の攻撃に対する、我々の「攻撃」もその中に抱括されるべきと認める。まさしく、そのような自国帝国主義との非和解的な斗争の質をもって学園斗争は斗われねばならぬ。それなくして、街頭斗争と学園斗争の結合はありえない。我々は百年母体粉砕へ向けこのダイナミックな斗いを組んぞゆかねばならぬ。現在の全高連を結成しえないのは何故か。それは、政府の手によって、高校生の政治運動の市民権が全く剝奪されているからである。我々は、かかる政治運動の市民権と我々高校生の手を獲得することなしに、全高連の展望

は何ら与えられない、奴隷以来規制され続けて来た「御堂筋」を我々は「暴力アモ」を突破したように、又それ以外突破しえなかつたように、我々は政治の市民権を、ダイナミックな政治斗争の過程で獲得していかなければならない。現在の運動に埋没しきつて、現在の運動の一直線上に70年安保紛争を見るのはなした、まさに70年安保紛争及び70年代階級斗争を認識したところの現在の運動を「計画としての戦術」として行なわねばならない。旧高連は60年安保の大衆的高揚期に結成され、その衰えをいつた。70年安保には、60年の時のような自然発生的高揚は期待できなけれ、状況はますます70年安保斗争を担いうる部隊の現在のな創出を要求している。

我々の斗いは、自国帝国主義の根底からくつがえす斗いとせねばならない。街頭の「反戦反帝暴力斗争」と同様の斗いは、学園内部に於ける政治ストリ「反戦ストライキ」として体现せねばならぬ、帝国主義の

支配構造の根底的な打破（小↓中↓高↓大という労働力商品生産工場のパイプ粉砕）の最も有効な形態としてあげられるだろう。

### (3) 旧高連結成と70年安保紛争の現実性 (10・21の政治的意義)

- ① 高連の結成はプロレタリアートの共通利害に抱括される。
- ② 反戦斗争は反戦反帝斗争、自国帝国主義打倒の斗いとして斗われるべきであり、その斗いのみが、ヤトナム人民と連帯するプロレタリア国際主義を提出している。
- ③ 高連への抑圧は帝国主義的国内再編の一環としてある限り、街頭と同様の学園斗争を斗う必要がある。（個別斗争も、国際反戦斗争と結合させることによつて人民的政治斗争へと高めねばならぬ）

### ない)

- ④ 学園斗争に於ては、暴力権威そのものを打破する斗いと行なふ必要がある。単なる物理力では国家権力はビクともしない。ストライキも、自国民主管理の学園ユニオン設置を前提とせねばならぬ。
- ⑤ 政治の市民権は我々のダイナミックな斗争の過程でしか勝ち取りえない。
- ⑥ 70年安保紛争及び70年代階級斗争を認識した現在の斗争は「計画としての戦術」として行なわれなければならない。（現在の運動の一直線上に70年安保紛争は展望しえない）
- ⑦ 人民的政治斗争への意欲は、市民権の獲得の過程で、大衆の運動を通じて勝ち取る。
- ⑧ 10・21に旧高連に呼びかけ、我々高連生をストライキ敢行されることは、革命闘争の大きな一歩前進となる。

### (4) 具体的方針

- ① 8月下旬、国際反戦反帝国際委員会委員を結成。徹底した討論による理論武装。
- ② 9月上旬から徹底した情報戦、自国新運動化を勝ち取るための交渉戦及び討論戦を各入部書生に実施。突出のスト要求、及び各校授業ボイコットと拒絶結果。
- ・大阪 ↓ ・東京 ↓
- ・札幌 ↓ ・仙台 ↓
- ③ 高連生を組織化する。
- ④ 高連生を組織化する。
- ⑤ 高連生を組織化する。
- ⑥ 高連生を組織化する。
- ⑦ 高連生を組織化する。
- ⑧ 高連生を組織化する。



しに存在する故に、月として運動しなくてはならない  
と結論するのは誤りである。それはやはりこの単純  
な思考には、呆然とする。我々は、プロレタリア統一  
戦線の一翼を主体的に担わなくてはならない。この命  
題の論証の前に彼等の誤謬の原因をみい出さなくては  
ならない。といつのは、この論証は、彼等の誤謬の原  
因を追求しないでは決して出来ず、又、追求と併明す  
ることこそ論証となりうる。

彼等の誤謬は、重大である。彼等の学園斗争におけ  
る大衆英雄主義、大衆操作主義、街頭斗争における日  
和見主義、政治主張における小ブル一揆的傾向が、こ  
の誤謬に規正されるのだ。

彼等の誤謬をみい出すには、彼等に横は問いをせし  
続けなくてはならない。その問いとは、『教育とは何  
なのか?』という根源的な力テゴリーに対する問いだ  
ある。

彼等にとつては、その力テゴリーは、互いに意識統

一とないというものらしい(全く理解してないのに  
)、そして彼等は、教育に関しては、権力からの正  
九なしの中立、その二つのみの問題としてしか扱えな  
い(いや、扱えられない)とした方がより正確だろう。  
このことは、一体どういつことを意味するのか。それ  
には、次に記すパンフの一部を見ればいじらう。  
『君達は沈黙するのな  
沈黙は黙認を意味するのだ。  
ヤトナムとは人が死んでい  
日本は加担している  
だから、我々は立ち上らねばならない』

まさに、彼等は小ブル平和主義・小ブル民主主義の  
ものである。即ち、市民主義運動そのものである。  
60年母保バンド(共産主義者同盟)社会主義学生同盟  
一保阻止高校生協議)のあの、ズブズブの市民主義  
を止揚した(はず)の彼等が、今や夢を再度と、市民主  
義細菌に犯れられている。我々は、対正する高校生諸潮流が

# 府高連運動の中間総括

—府高連書記局—

我々が去る五月、新しい高校生運動の形成を迫り求  
め、旗上げした府高連の中間総括は今や急務となっ  
ている。というのは、確かに、我々はこの大阪の高校  
生運動の主要部を担い、最も果敢に局面を切り開いて  
きたけれども、6月21日斗争(神田を日本のカルチ  
エ・ラタンにという斗争(詳細・総括は府高連ニユー  
ス号外)・ASPAC斗争に於いてみられたように、  
情報の変化に応じた形で、新たな斗争というものが、  
その斗争のパターンを形成することが急務なのだ。  
我々は、この経験で新たな斗争のパターン形成へと  
発展させねばならぬ。いつまでも、その形態に精神主  
義的にとりつかれていってはならない。そこには、進歩  
も弁証法もありはしないのだから。

I  
先ず、総括の視点を明らかにしなければならぬ。

その視点は、我々がなかなえていた諸問題を正して整理  
される。我々は、その諸問題を簡潔書きにすると、  
の月としての運動—その克服  
の街頭斗争と学園斗争の結合の問題  
の補充物としての運動—その止揚  
の(1)の問題はプロレタリア統一戦線の問題として扱  
(2)は相互作用を成している。又、(3)は重層高校の二  
度に渡る学園斗争の問題としてある。であるが故に、  
我々は、これら二つの二つの文章を、IIプロレタリア統一  
戦線についで、III街頭高校に於ける学園斗争にフックと  
いうふうに展開する。

IIプロレタリア統一戦線  
高校生は、確かに月として存在する。この表に隠し  
ては、東京高校生協議会諸君、及び反戦高校生諸君は正し  
い。しかしながら、存在論的にこの事に関わり、月と



この様な状態にあることを、残念に思つて、何故なら、  
対立する諸潮流の運動にみける非建設的發展こそが  
真の運動の深化・発展をもたらすからである。要する  
に、彼等の運動の意識は次の高橋加巳の言葉に収約さ  
れる。「我々はなるほど有色人種ではあるが、人種的  
には黒人ではないわけだ、あのいつぞきごに怒る根  
拠よくない」という意識、決して自己の問題でない。  
（文芸8月号）と云うのであるから、彼等の「問題を自己  
のものに！」という叫びは空洞化し、市民主義に或り  
は体制内に組み入れられるのだ。

教育とは、社会分業とあり、労働力商品の再生産過  
程である。従つて、よりよい学校へ行きたいという願  
望は、より高価な労働力商品にとり願望へと通じる。  
教育を労働力商品の再生産過程と認識した時、労働  
者と我々との連帯が、同質の闘いでもつて構築できら  
る。即ち、労働者と同質の苦痛を我々は甘受しなく  
はならないのだ。換言すると、我々の利益は労働者の

それと同質のものである。——このことがプロレタ  
リア統一戦線の内容である。

この内容を反省した諸潮流は、学生運動の予備軍化  
してゐる。即ち、大学に入つて、全学連に入らるたあ  
の組織となつてゐるのだとこれではまるきり運動会の手  
行演習ではないか。我々はこつこつと諸潮流に時間を  
費す程、時間ともあましてはいない。直ちに次の問  
題へと進まなくてはならない。

### Ⅲ市岡高の学園運動の総括

市岡高生は、今年にはいつてから二度の学園斗争を  
経験してゐる。二度目の斗争は、現在継続してゐる。  
市岡に於ける一度目の学園斗争、強制異動阻止斗争の  
ときに結成された全大阪強制異動斗争委員会は、現在  
の府高連入と解凍発展したのだ。我々は、市岡に於け  
る斗争が、今後の高校生運動の型を決定するものとし  
て、旧来の民青的は学園斗争の一切を訣別を告げ、  
の内容を貫徹すべく試みた。